

新根室プロレス奇跡の物語が描く

「サムソン宮本をさがして」

「奇跡が起こる」のがプロレスですよ。」
2011年にNHK教育テレビ(Eテレ)の番組『時々迷々』でプロレスを題材にしたドラマが放映された時、実況中継の解説者役で出演させていたことがあった。劣勢の展開が続く中、もうダメだと思われた場面で主人公役の高木三四郎(DO)が、カウント3ギリギリでフォールを跳ねける。

その瞬間、冒頭の言葉を無意識のうちに叫んでいた。台本になかったセリフでありながら、カットされることなくそのままオンエアとなった。

どのスポーツやエンターテインメントでもミラクルは生み出され、見る者の心を描きだす。ただ、奇跡そのものがジャンルの特性と呼べるほどの位置にあるのは、プロレスが一番なのではないか。

常々、そんな思いを抱きながらリング内外を見つめてきた。おそらく、心のどこかにジャストなタイミングで言葉として表したいという念があったからあの時、口走ったのだと思えてならなかった。

プロレスを見続ける中で、極上の奇跡を何度となく体験してきた。新根室プロレスとの出逢いも、間違いなくそれに当たる。どんな小説家でも描けぬような物語は、東京から遠く1500km離れた日本列島最東端の地で紡がれていた。

日本のプロレス文化は戦後、力道山先生がアメリカから輸入する形で始まった。その後、弟子に当たるアントニオ猪木とジャイアント馬場が新日本プロレス、全日本プロレスをそれぞれ設立。長きに渡り2つの会社で興行戦争を繰り広げ

るライバル期が続く。プロレスは大衆娯楽として定着。90年代に入ると「インディペンデント」とされる中小規模のプロモーションが乱立し、多団体時代を迎えた。

その中で、ザ・グレート・サスケが地元・岩手県で初の地方発信団体「みちのくプロレス」をスタートさせたことから、東京・大阪以外にもプロモーションが生まれていく。この業界は、協会やライセンスといった統一機関がないため「旗揚げしました」と手をあげれば成り立つてしまうジャンル。

各地方にローカルプロモーションが増え、さらにはプロを名乗らずアマチュア団体の形で活動するケースも出てきた。普段は社会人として働きながら、地元のお祭りやイベントへ呼ばれ試合を提供することで地域の活性化に貢献する。

「アマチュアプロレス」という言葉としてはおかしな名称が当たり前に使われ「あんなものは素人のマネ事だ」と眉をひそめる見方がある一方、彼らは自分たちが本職の選手とは違うと自覚し、リスペクト心による線引きをもって活動する。重要なのはプロかアマかではなく、地元の人々のためになっている「実績」の方だ。

新型コロナウイルスの影響で大手プロモーションが地方巡業をおこなえなくなった時、地元でそうした団体が活動する地区は、それによってプロレスとふれあうことができた。ローカルにはローカルとしての存在意義がちゃんとある。

現在、日本にはプロ・アマ、社会人を合わせると青森、山梨、富山、石川、三重、和歌山、徳島、高知、長崎、熊本、鹿児島を除く36都道府県にプロレス団体が存在するらしい。新根室はそのうちの「一つにすぎず、業界的にはほとんど知られた存在ではなかった。

ところが、2017年に身長3m、体重500kgのアンドレザ・ジャイアント・パンダがデビューし、その試合をYouTubeで公開するや彼らを取り巻く状況が一変する。発端は、大日本プロレスのアドバイザー・小林が食いついたことだった。

「もともと新根室さんは日本に数ある団体の中



© KOW(つゞ) / 吉原孝太郎

で私ももっとも上がりたいたいと思ってた。キャラクターがみんな面白いから。それで3年くらい前からずっと新根室に上がりたいたってツイットしていたんですけど、そんな中であのジャイアントパンダが現れた。そのタイミングで自分がスタン・小林をやっているということは、これは今やるしかないなと」

普段は160kgの体格を生かしたハリバリのデスマッチファイターでありながら、そうち方面にも鼻が利く男と言えた。アンドレザのデビューと前後して、小林が自ら「不沈艦」スタン・ハンセンをオマージュしたスタン・小林に変身していたのも運命的としが言いようがあるまい。

昭和のプロレスファンなら誰もが知っているハンセンと「巨人」アンドレザ・ジャイアントの田園コロシアム決戦(1981年9月23日)をパンダとの闘いで再現させる。新根室のメンバーにとって、それはまったく想定外のオファーだった。

まさかプロの方から自分たちに興味を持つ人間が現れるとは、が正直なところだし、ましてや本職のレスラーと絡むなど許されぬ話だと思っていたからだ。実際、小林より一足先にアンドレザ戦をオファーしてきた選手がいたもの、その時は丁重に断っていた。

「ウチが北海道巡業にいくんで根室から一番近い釧路なら」ということでオファーしたら通ったんです。ファンの皆さんの共感が後押ししてくれたようなものです。聞くところによるとプロとの交流はしないようにしていたらしいんですけど

ど、みんなの声が動かしてくれました(小林)

2017年10月4日、大日本の釧路大会にて小林VSアンドレザ戦が実現したことで、さらにファンの間での関心が高まり、1ヵ月後の11月17日にはパンダの聖地・上野恩賜公園の野外ステージに巨大熊貓山脈がやってきて再戦。その傍らに笹を持って立っていたのが新根室プロレス会長・サムソン宮本だった。

「我々がやっていたことなんて、マスコミさんに受け入れられないと思っていました。でも、週刊プロレスさんや東京スポーツさんに掲載していただいて、いいのだからうかうかという思いと同時に、本当に嬉しかったです」

アンドレザファイバーが業界を席巻するようになった頃、宮本さんからそんな言葉を聞いたことがあった。大日本登壇を機に他団体や道外のイベントのオファーが舞い込むようになってからも、新根室メンバーたちの姿勢は変わらなかった。

ある大会で、彼らは控室前の通路にいた。どうしたのかと尋ねると「いえ、プロの皆さんと同じ部屋にいるのが申し訳なくて……この方が僕は落ち着くんですよ」とサムソン。

テレビ出演、紅白出場グループ、純烈のコンサートでの共演、大会場におけるプロレス興行……何もかもが、根室に住むメンバーたちにとっては目に痛いほどの煌ひやかする世界。拭えぬ戸惑いの中で「これでいいんだ」という答えを導き出すのは、観客の喜ぶ顔と声だった。

北海道の隅々まで自分たちが追及していた新根室の活動意義は、どれほどステージが大きくなるうとも変わらない。それが、プロと絡む上での宮本さんの拠りどころとなり、メンバーたちも同じ意識でいられた。

最初はアンドレザに対する興味から入ったプロレスファンも、そうした新根室ならではの、ぬくもり、に惹かれていった。プロとアマの枠を超越しここまで支持された前例は、業界の歴史の中でなかった。

だからこそ——2019年9月14日に宮本さ



鈴木健.txt

(表現ジャンル編集ライター)

プロフィール

1966年9月3日、福島県会津若松市生まれ。1988年より21年間『週刊プロレス』の編集記者から編集次長を務め、2009年よりフリーとなりプロレス、音楽、演劇等の表現ジャンルについて執筆。プロレス中継では50団体以上の実況と解説を経験。アンドレザ・ジャイアントパンダの試合場内実況、新根室プロレス東京大会の場内解説を務める中で交流を重ね、アンドレザのトークライブも企画する。プロレスを題材とした小説『アンドレ・ザ・小学生』(https://wanibooks-newscrunch.com/category/series-054)を執筆。著書に『プロレス きょうは何の日?』『白と黒とハッピー〜純烈物語』等がある。

© 鈴木健.txt

んが平滑筋肉腫(へいかつぎんにくしゅ)の難病を患っていること。年内の新根室解散を発表した時はショックなどという言葉で表しきれぬものがあった。それまでの多幸感とのギャップがあまりに大きく、現実として受け入れられなかったのはファンもメンバーと同じだった。

10万人に3人しか発症しないとされる病気で、小腸に見つかった悪性腫瘍は放射線治療・抗がん剤も効かず「治療法はありません」と医師から宣告を受けた。生存率が5年で33%、10年で0%という絶望的な現実を2017年に突きつけられた時、宮本さんはメンバーと話し合い、そして約束する。「これから何年続けられるかわからないけれど、新根室プロレスが有名になって東京で単独興行ができれば解散しよう。それを目標にやってみよう」

この時点ではアンドレザが大ブレイクする前。アマチュア団体の自分たちが東京で単独興行を開催するなど夢のまた夢だった。その後、プロレス界の枠を超えて世間まで届くようになった時、喜びと同時に「いつまでこのブレイクが続くのだろう」「過性のブームとしてすぐに終わってしまうのでは」と不安を抱いていた。

常に命と向き合っていた宮本さんは、自分に残された時間がけっして長くはない現実を否応なく意識する毎日を送った。2年間、難病を表に出さず根室から全国へ幸せを運ぶべく、ハカバカしいことを大真面目にやり、そしてプロレスに対し真摯であり続けた。

2019年10月13日、新木場1stRINGで開催された初の東京大会。それまでの流れからいけば主役はアンドレザとなるはずなのに、集まった超満員の観客が求めていたのはサムソン宮本という人間と、その仲間たちと空間を共有することだったように思う。

「コミカルな試合で見る者を笑わせたり楽し

ませたりするのは、他のローカルプロモーションやアマチュア団体でも可能だろう。だが新根室には、人間にとつての「生」を生々しいまでに描く物語があった。

それはけっして望んでいたものではなかった。にもかかわらず、サムソン宮本はすべてを観客にさらけ出した。楽しんでもらうため、感じて取ってもらうため」という、実にシンプルなおもてなしによって。

その思いは、オーディエンスがいなくてもでも変わらなかった。新木場大会から2カ月後、私は初めて根室の街を訪ねた。

釧路空港、中標津空港のいずれからでも市内までは車で数時間。往路の時点で、これまで会うたびに「また東京へ来てくださいよ」と軽々しく言っていた自分を恥じた。

自宅のヘッドホン横たわる宮本さんと話す。その中で「いつか残りたこと」があつて「新根室が解散する前にどうしても形にしたいんです」と切り出された。

翌12月6日の早朝、まだあたりは真っ暗なのにもかかわらず、数人のメンバーが新根室の拠点である「フルート」(宮本さんが経営する玩具屋)に集結。そこから車を1時間ほど飛ばし到着したのは、真冬の極寒に包まれた納沙布岬だった。

そして朝日が昇ってくるタイミングで、根室と強い関わりを持つ某国の要人(「ほいキャラクター」を相手にアンドレザが闘い、SPによる銃撃を受けながらも不屈の闘志で逆転勝利を収めるという「作品」を描いた。もちろんその場は観客不在だ。

にもかかわらず、ちゃんとエンターテインメントになっていた。驚いたのは、このよつな一円にもならぬ試合をやるために早朝から集められたメンバーが、誰一人として嫌な顔ひとつしていなかったこと。

彼らは夜明け前に起き、氷点下の納沙布岬まで戻って、自宅に戻ったらそのまま仕事へと

向かったのだ。聞かなくても「会長のやることだから」とこれまたシンプルな理由で動いているのがわかった。同時に、サムソン宮本のカリスマ性に唳らされた。

結果的に、非公式ながらもこの試合が宮本さんの「遺作」となった。ここからは、2021年に上梓した拙著『純烈物語20-21』のあとがきから引用させていたたく。

「亡くなられる6日前の9月5日に「お久しぶりです。今日は体調がいいので、健さんの都合のよい時間にお電話いただけるとありがたいです」とLINEが送信されてきた。いったい、何を言っているかと思っているとイベント(当初、東京で宮本さんを励ますトークライブが企画されていた)に関する「こういう形で協力したいのですが」というものだった。「宮本さん!こんな大変な状況にいながら、そんなくだらないことを考えて、しかも電話するのもシンドいのにそれを伝えようとしたんですか!」

(2019年)大晦日をもって、団体としての活動に終止符を打ったにもかかわらず、宮本さんの頭はプロレス脳のままだった。病魔と闘いながら、最期の最後までサムソン宮本は稀代のエンターテイナーだった。

6分54秒間の最後となってしまった会話。そこで聞いた宮本さんの言葉を、純烈のファンにもお伝えしたい。「家族と」一緒にいられて今「幸せですよ」

「難病が発覚したあと、その痛みと苦しみを表に出さずアンドレザ・ジャイアントパンダとともに幸せを届け続けた宮本さん自身に訪れたハッピー!それが家族の存在だった」

2020年9月11日13時29分、サムソン宮本は幸せを抱いたままみんなの前から姿を消した。しかし、その後もメンバーたちは変わらぬ存在を感じ取っている。

不測の事態やアクシデントがあると、誰ともなく「またサムソンがいたはずだ」と言いがかりが出る。無理にそう思うように自分たちを仕向けるのではなく、実感に基づいたものなのだ。

「会長ならやりかねない」という揺るぎなき共通認識。2022年10月23日、2度目の新木場大会で宮本さんが生前に遺したメッセージ映像を見たTOMOYAが、新根室の活動を再開させることへ前向きになったのも、どこかで今なおその存在を感じているのが大きかったはずだ。

2021年12月、そんな彼らのドoramaを追い続けてきた北海道文化放送がドキュメンタリー番組を放送。それに最新情報や未公開映像を加え再編集されたのが本作品となる。

おそらく宮本さんは、いてもたってもいられなくなり全国の劇場へ出沒し、その存在感を天上から浴びせるに違いない。それがどんな形となって現れたか、X(旧ツイッター)でポストしていたのとメンバーが喜ぶ。

プロレス界には10月より公開された「アントニオ猪木をさがして」に次ぐ映画となる。もう書かなくともお気づきだろう。

この「無理しない、ケガしない、明日も仕事!新根室プロレス物語」は「サムソン宮本をさがして」でもある。さがした者だけが、アンドレザ・ジャイアントパンダに大きな大きなその存在と今も逢えるのだ。